

会員各位

平成 25 年 6 月 22 日

平成 25 年度定期総会挨拶

会長 多田 丈夫

本日は、東京都公立高等学校退職校長会第 30 回定期総会を開催しましたところ、元教育庁次長 鳴川智久様をはじめ、東京都退職校長会会長 片岡敦子様、本会の事業に協賛いただいた方々など、多数のご来賓をお迎えし、錦上花を添えていただき、心から御礼申し上げます。鳴川智久様には、後ほどご講演をいただきます。

また、米寿を迎えられた先生方並びに叙勲の榮譽に輝いた先生方、誠におめでとうございます。先生方がますますお元気で活躍されることを心から願うと共に、本会への変わらぬご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

さて、未曾有の大惨事を引き起こした東日本大震災から 2 年 3 ヶ月が過ぎました。「……人は誰でも答えのない悲しみを受け入れることは苦しくて辛いことです。しかし、日本が一つになり、その苦難を乗り越えることが出来れば、その先に必ず大きな幸せが待っていると信じています。だからこそ、日本中に届けます。感動、勇気、そして、笑顔を見せましょう、日本の底力、絆を」……と。これは、昨年 3 月 21 日、忘れもしない、春の甲子園に出場した石巻工業高校主将 阿部翔人君の選手宣誓でした。

また、「……自然の猛威の前には人間の力はあまりにも無力で、私達から大切なものを容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というには、むごすぎるものでした。辛くて悔しくてたまりません。命の重さを知るにはあまりにも大きな代償でした。しかし、苦境にあっても、天を憎まず、運命に耐え、助け合って生きていくことが、これからの私たちの使命です。……」と。これは、宮城県気仙沼市の階上(はしがみ)中学校 3 年生梶原祐太君の卒業式の答辞の一部です。

私は、あの選手宣誓、あの卒業式の答辞を聞きながら、言語を絶する窮地に追い込まれながら、厳しい現実に対峙する被災者の気持ちを忖度している彼らの強い精神性に驚かされました。我々はいろいろな形で今後とも被災地を応援をしながら、これからの日本を背負って立つ若者達の教育に「意味ある大人」として寄り添い、力を尽くさねばと強く思った次第です。

一方、我々自身は、この長寿社会を生きる主人公として共に心豊かに歩み続けねばなりません。しかも、多年にわたって培った我々の経験と力量は依然として健在であり、世の中がその力を求めています。したがって、日本の若者の範となり、お互いに手を携えてお世話になった東京都のために、住み慣れた地

域社会のために、もっともっと貢献していく必要があると考えております。そのためにも、本会の存在意義は極めて高く、少しでも世のため人のために、皆様の協力を得て、様々な形で力を尽くしたいものです。

お蔭様で、この会も設立 30 年目を迎えました。その足跡を辿りながら、常に、東京の高校教育を全力で推進している現職の校長先生方を組織として如何に支援するかを真剣に考えてまいりました。この度、その証しにとお手元にある退職記念誌―特輯号―の発刊にこぎつけました。この発刊にあたり、快く協賛いただいた東京都教職員互助会様をはじめ、関係各位に心から感謝申し上げる次第です。今後ともご支援、ご協力のほど重ねてお願い申し上げます。

この 4 月、東京都は今後の 5 年間を見据え、東京都教育ビジョン(第三次)を策定し、これを教育振興基本計画として位置づけました。東京都が推進するこの新しい動きにも注視しながら、多様な高校生の潜在的能力を開発してほしいと願う都民の期待に応える都立高校の学校経営や質の高い教育の創造という大きな課題に対し、微力ではありますが、本会もバックアップしていきたいと考えております。そのためにも、都教委と校長協会との win-win の関係を今まで以上に構築していただき、本会も一步踏み出し、組織を上げて都教委との具体的な連携・協力をしていきたいと思っている次第です。

終わり、ご参会の先生方、並びに本会会員のすべての皆様のますますのご発展とご健勝を心から祈念しながら、この記念すべき日のご挨拶とさせていただきます。有り難うございました。